



聖徳大学・聖徳大学短期大学部 松戸市・松戸市教育委員会 共同企画展

フジタとイタクラ エコール・ド・パリの画家、ふじ た つくはる 藤田 嗣治 と いたくらかなえ 板倉 鼎 ・ す み こ 須美子

会 期：2019（平成 31）年 1 月 16 日（水）～3 月 16 日（土）

会 場：聖徳博物館（松戸市岩瀬 550 聖徳大学川並弘昭記念図書館 8 階）

< 目 次 >

1. 開催概要
2. 出品予定作品・資料
3. 展覧会のポイント
4. 展覧会内容
5. 展覧会キーワード
 - (1) エコール・ド・パリ
 - (2) 藤田嗣治（略歴）
 - (3) 板倉鼎（略歴）
 - (4) 板倉須美子（略歴）
 - (5) 藤田嗣治と板倉夫妻
 - (6) 仏蘭西日本美術家協会
 - (7) 聖徳大学の学術資料コレクションと藤田嗣治作品
 - (8) 松戸市教育委員会のコレクションと板倉夫妻の作品
 - (9) 松戸市立博物館と目黒区美術館で開催された板倉鼎・須美子展
 - (10) 「没後 50 年 藤田嗣治展」
 - (11) パリの「藤田嗣治展」
 - (12) ジャポニスム 2018
6. お問い合わせ先

【問い合わせ先】

生涯学習部社会教育課

☎ 0 4 7 - 3 6 6 - 7 4 6 3



聖徳大学・聖徳大学短期大学部 松戸市・松戸市教育委員会 共同企画展

フジタとイタクラ エコール・ド・パリの画家、^{ふじた つくはる}藤田 嗣治と^{いたくらかなえ}板倉 鼎・^{すみこ}須美子



板倉 鼎《赤衣の女》1929年



板倉須美子《午後 ベル・ホノルル 12》
1927-1928年頃

1. 開催概要

- ◆会 期：2019（平成31）年1月16日（水）～3月16日（土）
- ◆会 場：聖徳博物館（松戸市岩瀬550 聖徳大学川並弘昭記念図書館8階）
- ◆アクセス：JR常磐線・JR乗り入れ地下鉄千代田線・新京成線松戸駅下車、東口より徒歩5分
※学内に駐車場はありません。
※聖徳大学への入構および川並弘昭記念図書館への入館には記帳等の手続きをお願いしております。
- ◆開館時間：9：00～17：00 初日のみ12：00～
- ◆休館日：日曜祝日、1月19日（土）、3月8日（金）、3月9日（土）
その他、学事日程等により休館となることがあります。
- ◆観 覧：無料
- ◆主 催：聖徳大学・聖徳大学短期大学部 松戸市・松戸市教育委員会
- ◆後 援：在日フランス大使館
JOBAN アートライン協議会
公益財団法人松戸市国際交流協会
一般社団法人板倉鼎・須美子の画業を伝える会



2. 出品予定作品・資料

◆藤田嗣治作品（油彩画）7点、関連資料（図書）4点（聖徳大学・聖徳大学短期大学部所蔵）

◆板倉鼎作品（油彩画）4点（松戸市教育委員会所蔵3点、個人蔵（松戸市教育委員会寄託）1点）、須美子作品（油彩画）6点（松戸市教育委員会所蔵）、板倉夫妻関連資料（映像、写真、書簡等）7点（松戸市教育委員会所蔵3点、個人蔵4点）

3. 展覧会のポイント

👉パリで開催される藤田嗣治展の会期に合わせて開催します！

2018（平成30）年、藤田嗣治の画業の全貌を展覧する過去最大級の回顧展「没後50年 藤田嗣治展」が東京と京都で開催されました。（7月31日-10月8日：東京都美術館、10月19日-12月16日：京都国立近代美術館）

続いて、2019（平成31）年にフランス・パリでも藤田嗣治の回顧展が開催されることが発表されており、世界的に注目が高まっています。この展覧会は、ジャポニスム2018（日仏友好160周年にあたる2018～2019年、日仏両国の関係府省庁・関係機関の連携により、パリを中心にフランス各地で実施される日本文化紹介・交流事業）の公式企画として、パリ日本文化会館で開催されるものです（会期：2019年1月16日-3月16日）。

👉エコール・ド・パリを代表する画家として世界的な評価を得ている藤田嗣治と、松戸市教育委員会と目黒区美術館が開催した回顧展によりその画業の再評価が進みつつある松戸ゆかりの夭折の画家、板倉鼎・須美子夫妻の関係に焦点を当てた初めての展覧会です！

4. 展覧会内容

1920年代のパリは、最先端の芸術を求めて世界中から集まった「エコール・ド・パリ」とよばれる芸術家たちが、思い思いに自らの感性を発揮した、華やかな時代でした。

その中で、乳白色の下地を用いた独自の技法で女性や猫を描いた作品が脚光を浴び、一躍時代の寵児となったのが、東京美術学校（現東京藝術大学）を卒業後、1913（大正2）年に渡仏した**藤田嗣治**（1886-1968）です。藤田はエコール・ド・パリを代表する画家として華々しい成功を収めました。

画家として芸術の中心地パリで揺るぎない存在となった藤田は、当時、画家を志して渡欧した日本人留学生たちにとって指標とすべき存在でした。藤田より15歳年下の**板倉鼎**（1901-1929）は、東京美術学校西洋画科の後輩にあたり、藤田の成功をまぶしく仰ぎ見た画家のひとりです。松戸で育った鼎は、1926（大正15）年に渡仏し、1929（昭和4）年9月に急逝するまでの3年間、パリに住み、寸暇を惜し



んで研鑽を積み、たくさんのすぐれた作品を描き、将来を囑望されました。

また、鼎の妻の**須美子**（1908-1934）も、鼎の留学に同行してパリに滞在し、1927（昭和2）年からは同地で鼎の手ほどきによって絵を描き始めました。

1929（昭和4）年4月、藤田を中心にパリの日本人画家たちが結集した「仏蘭西日本美術家協会」第1回展には板倉夫妻も参加しましたが、須美子が出品した独特な魅力のある作品を藤田が展覧会場で絶賛したことを、鼎が松戸の家族に宛てた書簡に記しています。

この「フジタとイタクラ展」では、藤田嗣治と板倉鼎・須美子夫妻がパリで生み出した優れた芸術と彼らのつながりをお伝えするため、聖徳大学が所蔵する藤田嗣治の作品と、松戸市教育委員会等が所蔵する板倉夫妻の作品を一堂に展覧いたします。

5. 展覧会キーワード

（1）エコール・ド・パリ（Ecole de Paris）

フランス語で「パリ派」の意。

1920年代を中心に芸術の都パリに集まった、主に外国人の美術家たちを総称する言葉。祖国を離れ、貧しく悲愴な生活を送った作家も多く、モンパルナス付近に住居兼アトリエの活動拠点を置くことが多かった。特定の流派があるわけではないが、民族的・文化的背景を感じさせる作品が多い。

代表的な作家であるシャガールは故郷ロシアの村の伝承を幻想的に描き、ボヘミアンの画家と呼ばれたイタリア出身のモディリアーニは首の長い人物像で知られる。また藤田嗣治は日本画を思わせる洗練された線を生かし、乳白色の肌の女性を描いた。ほかにリトアニア出身のスーチン、ポーランド出身のキスリング、ブルガリア出身のパスキンらが知られる。憂愁に満ちた街角の風景を描いたユトリロはパリの生れだが、仲間に加えられる。

エコール・ド・パリが最盛期を迎えた1920年代は日本からパリに滞在する芸術家の数が爆発的に増えた時期でもあり、その数は300人とも400人とも言われている。彼らの中心にいたのが、乳白色の肌の女性像で成功を収め、エコール・ド・パリの寵児としてパリ画壇に躍り出た藤田嗣治であった。この時期の日本人画家たちの多くは、藤田に続くべく異国の地で研鑽を重ねた。パリで新しい芸術を生み出すことを目指して、パリの公募展に出品を重ね、現地の画商に認められるべく制作をしていたこれらの日本人画家たちも、エコール・ド・パリに含まれる。

（2）藤田嗣治 1886-1968

（ふじた つぐはる、レオナルド・フジタ、Leonard Foujita）

1886（明治19）年11月27日、東京に生まれる。

1910（明治43）年、東京美術学校を卒業。

1913（大正2）年、フランスに渡り、モディリアーニらとともにエコール・ド・パリの代表的な画家として活躍した。とりわけ、裸婦に代表される「乳白色の肌」の優美な美しさは、多くの人の心をとらえ、藤田は一躍パリの寵児となった。



1933（昭和 8）年に帰国、二科会会員や帝国芸術院会員として日本洋画壇の中心的役割を果たした。

1949（昭和 24）年、再びフランスに渡り、その後二度と日本に戻ることはなかった。

1955（昭和 30）年、フランス国籍を取得。

1958（昭和 33）年、ベルギー王室アカデミー会員に推挙される。

翌年カトリックの洗礼を受けて、レオナルド・フジタ（Leonard Foujita）と改名。

1966（昭和 41）年、フランスのランスのノートルダム・ド・ラ・ペ礼拝堂のステンドグラスやフレスコ壁画が完成。

1968（昭和 43）年 1 月 29 日、スイス・チューリッヒの病院で逝去。享年 81。

（3）板倉鼎 1901-1929

（いたくら かなえ）



板倉 鼎《休む赤衣の女》1929 年頃

1901（明治 34）年、埼玉県北葛飾郡旭村（現在の吉川町）に生まれ、子どもの頃に松戸に転居する。

1918（大正 7）年、千葉県立千葉中学校を卒業。在学中、洋画家堀江正章の指導を受ける。

1919（大正 8）年、東京美術学校西洋画科に入学。岡田三郎助、田辺至らの指導を受ける。

1921（大正 10）年、在学中に第 3 回帝展に《静物》が初入選し、その後も合計で 4 度の帝展入選を果たしている。

1924（大正 13）年、東京美術学校西洋画科を卒業。

1925（大正 14）年、昇須美子と結婚。

1926（大正 15）年 2 月、妻・須美子を伴い、ハワイ経由でフランス留学に出発した。同年 5 月にホノルルで個展をひらいた後、ハワイを出発、アメリカ本土を経由して、7 月にパリに到着した。

1927（昭和 2）年 2 月より、ランソン・アカデミーのロジェ・ビシエールに師事。同年 11 月、サロン・ドートンヌに《Fruits d'automne》（秋の果実）が入選したのを皮切りに、サロン・ナショナルやサロン・デザンデパンダンなどフランスの主だった展覧会に入選や出品を重ねた。

1929（昭和 4）年には、藤田嗣治を中心として開催された仏蘭西日本美術家協会パリ第 1 回展に《赤衣の女》を出品している。

同年 9 月 29 日、敗血症のためパリの自宅で急逝。享年 28。



画家として大成する前に夭折してしまったために長く埋もれていたが、近年、松戸市教育委員会による大規模な回顧展が松戸市立博物館で開催され、さらに目黒区美術館でも開催されて反響を呼び、再評価の機運が高まっている。

(4) 板倉須美子 1908-1934

(いたくら すみこ)



板倉 須美子《ベル・ホノルル 24》1928年頃

1908（明治41）年、ロシア文学者昇曙夢（のぼり・しょむ）の長女として、東京市麹町に生まれる。

1921（大正10）年、文化学院に第一回生として入学。

1925（大正14）年に文化学院中等部を卒業し大学部に進むが、同年結婚のため中退。文化学院の恩師であった歌人と謝野寛・晶子夫妻の媒酌により板倉鼎と結婚した。

1926（大正15）年2月、鼎のフランス留学に同行して日本を発つ。途中ハワイに滞在し、米国本土を経由して、7月よりパリに住む。

1927（昭和2）年7月、鼎と共にベルギー、オランダを旅行。

同年9月、鼎の導きで油絵を始める。絵筆を執って間もない同年11月にはサロン・ドートンヌに《Kotoro》（コトロコトロをする子ども）（8号）が初入選。その後も1929年まで3年連続でサロン・ドートンヌ入選を果たしている。

1927年12月21日、長女一（かず）が誕生した。

1929（昭和4）年4月、仏蘭西日本美術家協会パリ1回展に出品した作品は、藤田嗣治の賞賛をうけた。

同年5月、次女二三（ふみ）が誕生するが、6月に死亡。

同年9月に夫・板倉鼎が急逝したため10月24日、一を伴いパリを出発した。12月2日に帰国し、千葉県松戸町の板倉家に戻るが、

1930（昭和5）年1月、長女一（かず）が死去（享年2）。

その後まもなく神奈川県鎌倉町稲村ヶ崎の実家に移り、昇家に復籍した。

帰国後は佐伯米子の紹介で有島生馬の家に通い絵の指導を受けるが、

1932（昭和7）年9月には結核が発覚し、絶対安静の病床生活に入る。

1934（昭和9）年5月10日、鎌倉町稲村ヶ崎の自宅で没。享年25。

代表作には明るい色彩を用いて想像力豊かにハワイの印象を描いた《ベル・ホノルル》シリーズがある。近年松戸市立博物館と目黒区美術館で開催された板倉夫妻の回顧展において、短くもナイーブで個性的な画業の全容が初めて紹介され、反響を呼んだ。



(5) 藤田嗣治と板倉夫妻

1913（大正 2）年に渡欧した藤田嗣治は、1926（大正 15）年に板倉夫妻が初めてパリの地を踏む頃には、押しも押されぬ一流の人気画家となっていた。鼎が松戸の家族に宛てた書簡には、「藤田氏は八年目にこちらで世間に出て行きました。」といったように、パリで成功した画家のモデルケースとして藤田の名が度々登場しており、彼にとって藤田は画家として指標といえる存在であったことがわかる。

1929（昭和 4）年 4 月、藤田を中心にパリの日本人画家たちが結集した仏蘭西日本美術家協会第 1 回展には板倉夫妻もそろって出品した。展覧会場で、藤田が須美子の独創的な作品を高く評価したことを、鼎が松戸の母に宛てた書簡に記している。

※この書簡は本展覧会に出品する予定です。

(6) 仏蘭西日本美術家協会

1929（昭和 4）年 3 月、パリに滞在する日本人美術家たちによって結成された団体。

日本人実業家の薩摩治郎八（1901-1976）を出資者として、藤田嗣治が会長を務め、美術評論家の柳亮（1903-1978）が常務理事、萩谷巖（1891-1979）ら 在仏の美術家 8 名が創立理事に名を連ねた。滞欧日本人美術家の創作発表の一助として毎年 1 回パリで日本人作家の展覧会を開催すると共に、フランスやヨーロッパ各地でも開催することが創立の意趣として掲げられた。

設立後は数回の展覧会を開催するも、組織の内紛によって瓦解した。展覧会の内訳としては、パリ 1 回展（1929 年 4 月 8-20 日）、ブリュッセル展（1929 年 6 月 14 日-7 月 13 日）、パリ 2 回展（1929 年 10 月 15-30 日）の合計 3 回であった。これらの展覧会のうち、藤田は 3 回全て、板倉夫妻はパリ 1 回展とブリュッセル展に出品している。

(7) 聖徳大学の学術資料コレクションと藤田嗣治作品

聖徳大学・聖徳大学短期大学部では、教育理念の一つである実物教育を積極的に進めるため、文学、音楽、美術、工芸等に関する学術資料、文献等を日本国内はもとより世界各地から蒐集・保存し、それらを聖徳博物館等で展示公開することにより、学生たちに本物の芸術に触れる機会を提供している。

こうした学術資料コレクションの一つとして、日本の近代美術史上特筆すべき存在である藤田嗣治の作品を所蔵している。本展ではその中から、フランスで高く評価され円熟期を迎えた 1936（昭和 11）年から、フランス国籍取得後の 1958（昭和 33）年頃まで、藤田が好んで題材とした子どもや女性を描いた作品を中心に展示する。

(8) 松戸市教育委員会のコレクションと板倉夫妻の作品

松戸市教育委員会では、松戸ゆかりの美術に関する調査にもとづいて優れた作品の



収集をつづけ、平成 30 年 12 月現在で、1,559 点の作品を所蔵している。これらのコレクションは松戸市立博物館や戸定歴史館等で開催する展覧会の際に展示公開し、また松戸市ホームページ内の「松戸市デジタル美術館」上でも公開している。

その中で、板倉鼎・須美子の作品については平成 3 年度から 4 年度にかけて松戸市内の板倉家において、また平成 11 年度には須美子の実家である鎌倉市の昇家において実施した作品・資料の悉皆調査等をもとに収集をつづけており、現在では鼎作品を 100 点、須美子作品を 26 点所蔵している。

(9) 松戸市立博物館と目黒区美術館で開催された板倉鼎・須美子展

若くして亡くなった板倉鼎・須美子夫妻は、その画業を広く知られる機会に長らく恵まれなかった。しかし、遺族が長年にわたり大切に保管していた夫妻の遺品を調査した松戸市教育委員会の研究の成果として、2015（平成 27）年に松戸市立博物館で「よみがえる画家 板倉鼎・須美子展」が開催された（主催：松戸市教育委員会、会期：2015 年 10 月 10 日-11 月 29 日）。また 2017（平成 29）年には、同展覧会を再現する形で目黒区美術館でも「よみがえる画家 板倉鼎・須美子展」が開催された（主催：公益財団法人目黒区芸術文化振興財団目黒区美術館、特別協力：松戸市教育委員会 会期：2017 年 4 月 8 日-6 月 4 日）。これらの展覧会により、それまで知られることの少なかった板倉夫妻の全貌が紹介され、その画業を再評価する機運が高まりをみせている。

(10) 「没後 50 年 藤田嗣治展」

藤田嗣治の没後 50 年の節目に東京都美術館と京都国立近代美術館で開催された展覧会。国内外から藤田の代表作が集められ、藤田の画業とその生涯を通覧する過去最大規模の回顧展となった。

なお、この展覧会には聖徳大学所蔵の大作《優美神》（1946-48 年、油彩・カンヴァス）が出品された。

【展覧会情報】

監修：

林洋子（美術史家）

学術監修：

高階秀爾（美術史家／美術評論家）

尾崎正明（茨城県近代美術館館長）

企画・構成：

東京都美術館

京都国立近代美術館

朝日新聞社

NHK

NHK プロモーション



[東京都美術館]

会期：2018年7月31日-10月8日

主催：東京都美術館（公益財団法人東京都歴史文化財団）、朝日新聞社 他

後援：在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本

特別協力：国際交流基金

[京都国立近代美術館]

会期：2018年10月19日-12月16日

主催：京都国立近代美術館、朝日新聞社 他

後援：在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本

特別協力：国際交流基金

（11）パリの「藤田嗣治展」

日仏友好160年を記念する事業「ジャポニスム2018」の公式企画として、パリで「藤田嗣治展」が開催される。

パリで名声を得、パリに没した画家の生涯をフランスに紹介する展覧会である。藤田はパリに渡り、エコール・ド・パリの芸術家として高い評価を得た。3度に渡るパリ滞在期間（1913-1931、1939-1940、1950-1968）中には、個展の成功やフランスへの帰化、カトリックへの改宗など藤田にとって重要な出来事がいくつも起こっている。この展覧会ではこれらのフランス滞在中の作品のみならず、中南米を経由して日本に戻り、日本各地やアジアにまで足を延ばした1930-40年代の作品や、終戦後の作品など藤田の生涯に渡る作品が紹介される。フランスで最も知られているのは最初のパリ滞在期に制作されたもので、これまで紹介されることが少なかった1930-40年代の作品はほとんど知られていないため、画家の第二の故郷ともいえるべきパリで日本内外にある藤田の作品を紹介しその全貌を展示する貴重な展覧会となっている。

今回の「フジタとイタクラ展」は、この記念すべきパリでの藤田嗣治展に会期を合わせて開催する。

【展覧会情報】

会期：2019年1月16日-3月16日

会場：パリ日本文化会館

主催：国際交流基金、京都国立近代美術館

特別協力：朝日新聞社、NHK

キュレーター：

林洋子（美術史家／文化庁芸術文化調査官）

ソフィー・クレブス（パリ市立近代美術館チーフキュレーター）

実行委員：

高階秀爾（大原美術館館長）

尾崎正明（茨城県近代美術館館長）他



(12) ジャポニスム2018

日仏友好 160 年を記念し、日仏の両国が連携して世界にまだ知られていない日本文化の魅力を紹介するため、2018 年 7 月から 2019 年 2 月までの期間、フランスで開催されている大規模な複合型文化芸術イベント。パリ内外の 100 近くの会場で、展覧会や舞台公演に加えて、さまざまな文化芸術を紹介する事業となっている。

19 世紀のフランスで浮世絵に代表される日本文化が紹介されたことで、ゴッホやモネなどフランス内外の芸術に多大な影響を与えるにいたった「ジャポニスム」という現象に倣い、「ジャポニスム 2018：響きあう魂」のタイトルのもとで世界をふたたび魅了すべく現代日本が創造するジャポニスムの企画である。パリの「藤田嗣治」展はこの公式企画のひとつである。

6. お問い合わせ先

- ◆松戸市教育委員会 社会教育課 美術館準備室
047-366-7463 (平日 8:30~17:00)
- ◆聖徳大学・聖徳大学短期大学部 聖徳博物館
047-365-1111 (大代表)

《参考文献》

日本近代文学館 小田切進編『日本近代文学大事典』講談社 1984 年 10 月
神奈川県立近代美術館・三重県立美術館編『パリを描いた日本人画家』朝日新聞社 1986 年 2 月
徳島県立近代美術館・そごう美術館・奈良そごう美術館・共同通信社事業部編『薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち』共同通信社 1998 年 10 月
藤田嗣治『藤田嗣治画集 素晴しき乳白色』講談社 2002 年 11 月
松戸市教育委員会社会教育課美術館準備室 田中典子編『よみがえる画家 板倉鼎・須美子展』松戸市教育委員会 2015 年 10 月
東京都美術館・京都国立近代美術館・朝日新聞社・株式会社キュレーターズ編『没後 50 年 藤田嗣治展』朝日新聞社・NHK・NHK プロモーション 2018 年 7 月
「ジャポニスム 2018：響きあう魂」[online]<https://japonismes.org/about> (2018 年 12 月 14 日アクセス)
「公式企画 「藤田嗣治」展」[online]<https://japonismes.org/officialprograms> (2018 年 12 月 14 日アクセス)

プレス内覧および開会式のご案内

■日 時 2019（平成31）年1月16日（水）

（1）プレス内覧 午前10時より

（2）開会式 午前11時より

■会 場 聖徳大学川並弘昭記念図書館

（1）プレス内覧 聖徳博物館（図書館8階）

（2）開会式 図書館5階

※正門でプレス内覧にお越しの旨、お申し出ください。受付場所は川並弘昭記念図書館入り口となります。

※学内に駐車場はありませんので、交通機関のご利用をお願いいたします。

■交 通 JR常磐線・JR常磐線乗り入れ地下鉄千代田線・新京成電鉄松戸駅東口より徒歩5分

■開会式次第

（1）主催者あいさつ

（2）ご来賓祝辞

（3）テープカット

（4）展覧会観覧

■お問い合わせ先

松戸市教育委員会 社会教育課 美術館準備室 047-366-7463

e-mail:mcshakaikyouiku@city.matsudo.chiba.jp

聖徳大学・聖徳大学短期大学部 聖徳博物館 047-365-1111（大代表）